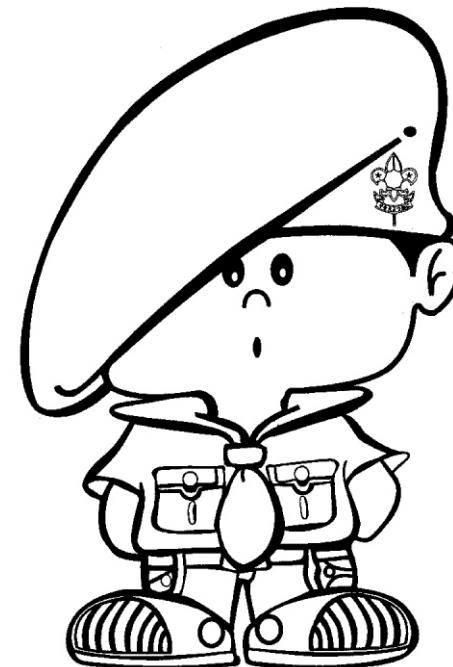


キャンピングストーブ ランタンの取り扱い方

野外生活のおきて

1. 自然の美しさが、永久に保たれることを願いその保護について考え、行動します。
2. 生き物を保護します。しかし、特定の生き物だけに有利にならないよう気を配ります。
3. 残飯や汚水などが、生き物に与える環境を知り、適切な処理に努めます。
4. 火の扱いには、細心の注意を払います。
5. 山道を歩くときやキャンプをするときには地表や植物に悪い影響を与えないよう気を配ります。



コンロの扱い方

1. コンロの種類



キャンプ場で最も多く見かけるストーブが、コールマン社製のこのタイプです。ホワイトガソリンを燃料とするツーバーナーは、実質的にコールマン社製しかありませんが、そのイメージ、実用性、耐久性などの点で大きな人気を誇っています。タンク内の空気を加圧して燃料を送り出す方式のため、ポンピングという作業が必要です。その分 LP ガス式のストーブより操作は面倒ですが、様々な条件下で得られる安定した火力は大きな魅力といえます。



多くのメーカーから様々なモデルが発売されています。共通する特徴は、ホワイトガソリン・タイプに比較してポンピングの必要がなく、燃料を装着するとすぐに点火でき、安定した火力が得られるという操作の簡単さです。燃料の脱着も簡単で、ビギナーでも十分に使いこなせるモデルがほとんどです。LP ガスの難点である低温にも、多くのメーカーが寒冷地仕様の燃料で対応しています。純正燃料しか使えないモデルがほとんどのため、品数の少ないキャンプ場の売店では燃料が入手しづらいこともあります。予備燃料は用意しておきましょう。



ガソリン・バーナー

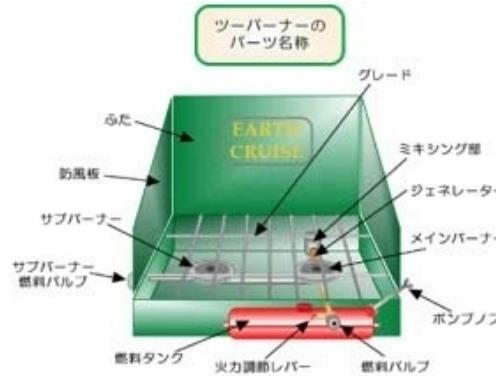
燃料を揃えた方が合理的という意味で、ホワイトガソリン・タイプのツーバーナーを使用するキャンパーにおすすめします。低温下でも火力が安定している点、ポンピングという作業が必要な点はツーバーナーと変わりありません。山岳での使用を考慮したモデルが多いいため、キャンプではオーバースペックぎみですが、道具としての存在感があり、所有欲をくすぐられるモデルもあります。



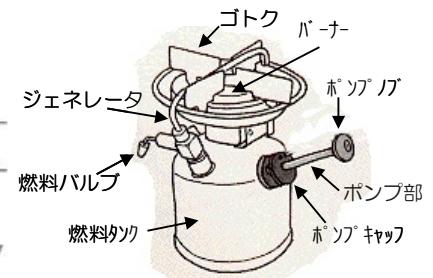
LPガス・バーナー

一般的な使用スタイルを考えると、ホワイトガソリン・タイプより、このLPガス・タイプがおすすめです。補助的役割である以上、操作は簡単な方がいいからです。さらにこのタイプはコンパクトに収納できるため、登山やツーリングなど、オートキャンプ以外にも活用できます。ホワイトガソリン・タイプのツーバーナーを使用するキャンパーにとっては、燃料の種類が増えることになりますが、クルマでの運搬ならばそれほど問題にはならないでしょう。

バーナー・コンロの各部名称



シングル・バーナーの名称



ツーバーナーの点火方法

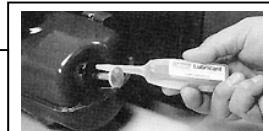
① 燃料は、8分目まで入れる



まず燃料バルブを締め、ポンプノブも止まるまで右に回しておきます。燃料は、ポンピングで圧力をかける空気をタンク内に残すため、満タンにせず 8 分目まで入れるのがポイントです。給油する時は付近に火気のない状態で、タンクを水平にして行ってください。

最初はこぼさないように慎重に。

1. リュブリケント（ポンプカップ用オイル）を、ポンプノブ脇の穴から 2~3滴注入する。ポンプカップとシリnderの間には、オイルが常にある事でシールが保たれていますので、定期的(1日1回)な注油が必要です。ポンプカップのゴムを保護するために必ず専用のオイルを使用してください。（コールマン リュブリケント）



② ポンピングは、硬くなるまで



燃料バルブがOFFなどを確認したら、ポンプノブを左に2回転させ、親指でノブの穴を押さえながらポンピングを開始します。手前に引いて奥まで押し込む正確なストロークを繰り返し、固くなつてノブが入らなくなるまで続けます。目安は100~150回です。固くなつたら親指を外し、ノブを押し込んで止まるまで右に回します。

しっかり持って正確なストロークを。

③ 燃料タンクをセットします



ジェネレーターの先端を本体の穴に通し、ミキシング部の穴に差し込みます。タンクのクリップを本体前部の穴に合わせて差し込み、しっかりと取り付けます。次にサブバーナーの燃料バルブが開いていないか確認し、開いていたら閉じてください。これで点火準備は完了です。

それぞれの穴にしっかりとセットする。

④ 点火直後に、再度ポンピング



点火レバーを上にし、柄の長いライターなどの火をメインバーナーに近付け、燃料バルブを左に1~2回転させて点火します。点火直後、さらにポンピングします。目安は10~30回です。この時燃料タンクがずれないようしっかりと押さえてください



最初に出る大きめの炎には注意しましょう。

⑤ 青い炎が安定のシグナルです



点火直後は赤い炎が出ることがありますが、ジェネレーターを通る燃料が気化されると青い色に変化し炎が安定します。安定しない場合は燃料バルブを素早く2~3回ひねってみてください。燃料の通りが良くなり安定します。安定したら点火レバーを下向きにし、燃料バルブで火力調整します。

炎が青色に変化したら正しく点火できた証拠です。

⑥ サブ・バーナーは、メインと併せて使用します



サブバーナーは単独では使用できません。メインバーナーを使用していることが前提で、点火はメインバーナーの炎が安定してから行なってください。ジェネレーターが十分加熱されないと、気化した燃料が届かないため炎は途切れますが、熱を帯びるとやがて安定します。

サブバーナーだけの使用はできません。

コンロ取り扱いの注意事項

(ア) ガソリン・LPガスに関係なく、複数のコンロを並べて使用してはならない。
燃焼時に発生した熱が対流し、コンロの燃料タンクが加熱されて『爆発』する。



(イ) コンロ本体を焚き火等の近くで使用してはならない。
焚き火等の放射熱でコンロが加熱されて『爆発』する危険性がある。

(ウ) LPガス等の空になったボンベを、焚き火やコンロの近くに置いてはならない。
空になったボンベには少量の燃料が残っており焚き火等の放射熱でコンロが加熱されて『爆発』する危険性がある。

★ 空のボンベは、必ず穴を開けて残りの燃料をすべて出してしまった事。

(エ) ガソリン等の燃料缶は、火の近くや日なたに置いてはならない。
炎や太陽の熱で、燃料缶が『爆発』する。

(オ) 点火する時に、バーナーの上に顔を出してはならない。
点火時の炎で、顔をヤケドしてしまう。

(カ) ガソリンは、専用の金属容器で保管すること。
一時的だからと、ポリタンクなどを流用すると爆発や火災の原因となる。

ランタンの取り扱い方

1. ランタンの種類



ホワイトガソリン・タイプ

特徴というより、このタイプの最大の魅力はランタンそのものが持つ雰囲気のような気がします。一般的に LP ガス・タイプより明るいと言われていますが、最近は非常に明るい LP ガス・タイプも数多く発売されていますので、一概に明るいのが特徴とは言えなくなりました。もちろん燃料代が安く経済的という利点もありますが、その分取り扱いがちょっと面倒という難点もあります。それでもデザインが醸し出すレトロな雰囲気や、ホワイトガソリン特有の柔らかな光は、他のタイプにはない独特の魅力です。気温が低くても安定した明るさを保ってくれるので、秋や冬もキャンプしうるを考えている人にはおすすめです。



LPガス・タイプ

ガスボンベやガスカートリッジを装着すれば、すぐ点火できる操作の簡単さが最大の特徴です。ほとんどのタイプが自動点火スイッチを備えているため、マッチやライターを用意する必要もありません。200ワットを越える大光量の大型モデルから、100ワット以下のコンパクトモデルまで種類が豊富なのも魅力です。燃料代がホワイトガソリンより割高という難点はありますが、宿泊延べ日数の少ないキャンパーにとっては、ほとんど気にならない程度です。また燃料の特性として低温下で燃焼効率が落ちるため、十分な明るさを得られない場合がありますが、寒冷地仕様の燃料を使うなどの対策をとれば問題ありません。



電池・タイプ

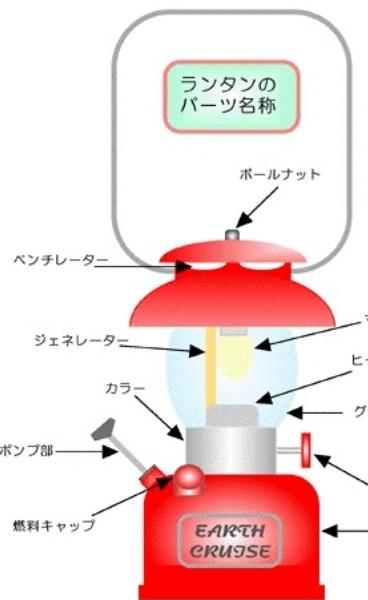
明るさという点では前の2タイプにおよびませんが、安全性という点で初級キャンプには不可欠の照明です。使用目的は、テント内の照明や携帯用照明です。子供でも安心して使用できるため、ニーズに応じて複数のモデルを使うキャンパーも少なくありません。テント内の照明ならランタン型、夜間トイレへ行く時の照明なら懐中電灯型といったように使い分けるといいででしょう。最近はその両方を兼ね備えたモデル、リモコン機能のついたモデル、防水機能の付いたモデルなど、実に様々なモデルが発売されています。体験的に言って、大型モデルは電池の本数が多く不経済で、かさばる割りに明るさが乏しいという気がします。コンパクトな中型モデルの方が使い勝手はいいようです。



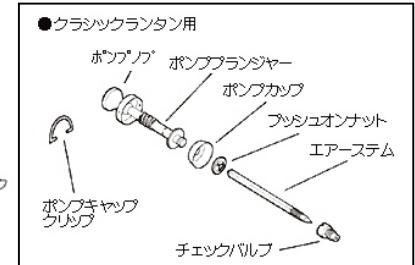
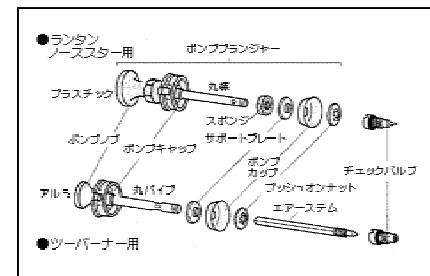
キャンドル・タイプ

必要性という点から考えると、なくてもいい照明ですが、キャンドルの光りが放つ独特的な温もりは、キャンプの夜の雰囲気作りにひとやく買ってくれます。基本的に補助照明ですが、特に常夜灯として申し分なく、防犯的な意味も含めた就寝後の照明に格好です。ローソクという経済性と安全性は大きな魅力ですが、使い終わった後の口の除去作業がちょっと面倒なモデルもあります。価格も安いしあれば何かと重宝するので、初心者にもひとつおすすめしたいランタンです。

2. ランタンの各部名称



ポンプ部の構造と部品名



3. マントルの交換方法



軽く折り目を伸ばすように広げます。



この時点でヒモはまだひっぱりません。



マントルが他の部分に触れないように。

マントルは必ず使用するモデルに対応したものを使用しましょう。また破損しやすいので取り扱いは慎重に。マントルを取り出したら、装着する前に指先で袋状にふくらませ、折り畳んであったカセをほぐしてあげましょう。

バーナーチューブの先端に切ってある溝に、マントルのヒモの部分がくるよにセットし、ヒモを絞ってしっかりと取り付けます。強く縛り過ぎるとヒモが切れたり、シワになったりしますので、力を入れ過ぎないよう注意してください。



マントルを傷つけないよう注意しましょう。

もしヒモを縛ってシワが片寄った場合は、この時点でできるだけ均等になるように整えておきましょう。その後余ったヒモはカットします。ヒモをカットしたらもうさわらないこと。万が一マントルが外れると、再度取り付けるのは至難の技となります。



燃えはじめたらもう触ってはいけません。

マントルは使用する前にいったん燃やして灰状にしなくてはなりません。これをカラヤキと言います。カラヤキは、マントルの下から火を点けて、火が上に燃え広がるように燃やします。燃えるとまず黒くなりますが、灰になれば再び白に戻ります。燃やすといつても一気に燃えるではなく、少しづつ広がるといった感じです。消えたように見えても案外燃えているものです。もし消えてしまったら、燃え残った場所に再度点火してください。



マントルは最初の半分くらいに組みます。

火がなかなか燃え広がらない時や、黒い部分が白くならない場合は、そっと息を吹きかけ燃焼の手助けをしてやるもの効果的です。ただし息はあまり強く吹きかけないこと。強すぎると破損してしまう場合があるからです。全体が均等に白くなればカラヤキ完了です。



点火はタイミング次第。習うより慣れろ、です。



マントルの交換時期

マントルは、多少の穴であれば問題ありませんが、破れた穴から炎が噴出してガラスのグローブに吹きつけている様なら替え時です。
穴が開いたままでも燃焼しますが、不完全燃焼の原因になるし、光量も落ちてしまいます。まだまだ使えると思いつらですが、ランタンの性能をフルに引き出すためには、マントルが正常であることが条件です。

LPガス・タイプの場合は、燃料バルブを開けて自動点火スイッチで点火すればOKです。1回で点火しなかった場合は、いったん燃料バルブをOFFまで戻し点火作業を繰り返します。

ホワイトガソリン・タイプの場合は、燃料バルブを目一杯開け、シューという音がジッジッという音に変わるもので待ち、音が変わったらバルブをOFFへ戻し、約1分ほど放置して生ガスを抜きます。

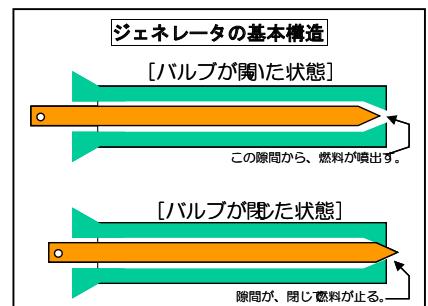
その後バルブを開けて点火します。点火したら30回ほどポンピング。なお、点火直後に炎が安定しない場合は、燃料バルブを素早く開け締めすると安定する場合があります。

どちらのタイプにしても、点火のタイミングが悪いとグローブ内に滞留したガスが一気にボッと燃焼し、ピックリしてしまう場合があります。

うまく点火できない場合は、グローブを外して点火し、その後にグローブや蓋を取り付けるという方法もあります。ただしその際は火傷しないよう十分注意してください。

4. ジェネレータの交換方法

「ジェネレータ」とは、金属管の中に細い針金がセットされた部品のことです、バルブの動きに合わせて中の針金が動いて、先端の小さな穴を開いたり閉じたりします。(右図参照) この為、先端の隙間にゴミやカスが溜まると燃料バルブを開いても燃料が安定して出なくなったり、バルブを閉じても燃料が止らなくなったりします。



まず、ボールナットをはずし、ベンチレーター、グローブをはずす。
この時、マントルをはずしておくと、作業がしやすい。
もちろん、マントルをつけたままでも作業はできます。



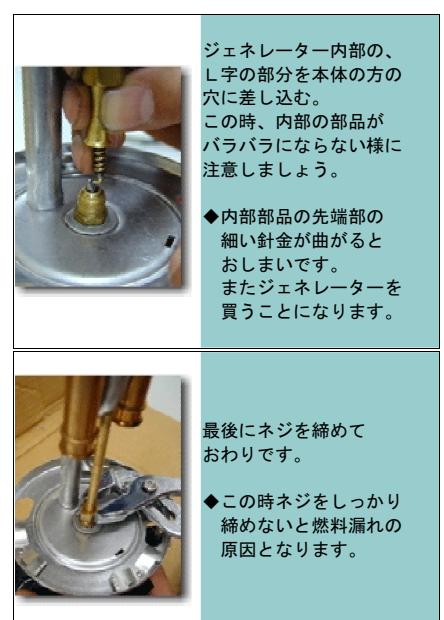
次に、ジェネレーター側（上側）のネジをはずし、ジェネレーターを上に上げて取り外す。



すると、こんな感じになります。



次に新しいジェネレーターに、先ほど取り外したネジをとおし、上のほうから取り付ける。



ジェネレーター内部の、L字の部分を本体の方の穴に差し込む。
この時、内部の部品がバラバラにならない様に注意しましょう。

◆内部部品の先端部の細い針金が曲がるとおしまいです。
またジェネレーターを買うことになります。

最後にネジを締めておわりです。
◆この時ネジをしっかりと締めないと燃料漏れの原因となります。

5. ランタンの活用

① 虫を除ける、ランタン・ワーク



最もポピュラーなランタンワークのひとつが虫除けです。テーブルの上には光量の小さいランタンを置き、タープの外に光量の大きいランタンを配置します。すると虫たちは外の明るい光に誘われて、テーブル周辺には近寄らなくなるという寸法です。光量に差があればあるほど効果は増大しますが、それでも完全に虫を排除することはできません。補助的に虫除けキャンドルを併用するのも手ですが、侵入者は虫ではなく私たちの方であるという認識は、頭の片隅においてください。

バルブで光量を上手に調整しよう。

② カラビナのランタンハンガー



ランタンを配置する自由度が高ければ高いほど、理想的な夜の照明環境を作ることができます。ランタンハンガーやスタンドを活用するのはもちろんですが、登山用のカラビナという道具があると、写真のようにタープのロープを利用してランタンを吊すことができ、ランタンワークの自由度がさらに増します。カラビナをご存じない方は分かりづらいかもしれません、ロープをはずす必要はありませんから、気軽にセットすることができます。ただし大型のランタンを吊す場合は重量がありますから、ペグやロープの張り具合に十分チェックしてから吊しましょう。

カラビナをロープに巻き付けます。
大型ランタンを吊す時は慎重に。

③ アルミホイルで、簡単リフレクター



ランタンには光量を調節するバルブがついていますが、照らす方向を調節することはできません。そこでリフレクターと呼ばれるアクセサリーがメーカーから発売されています。これは、光を特定の方向だけに集めて照らす道具です。しかしアルミホイルがあれば、自作のリフレクターを作ることができます。グローブを外し、光を遮りたい部分にアルミホイルを貼るだけ。明かりを片方に集中できると同時に、反対側を間接照明のような柔らかい光に変えることができます。明眩、方向、隣接直接のそれぞれを使い分けて、夜の照明を演出してください。

アルミホイルの幅によって光も変化します。

④ ケースのガタつき防止



ランタンは衝撃に弱いため、ケースは必需品です。しかしケースに入れたからといって油断は禁物。ケース内のガタつきでマントルやグローブが破損してしまうということもあります。ならばそのガタつきを取りのぞきましょう。簡単でつと早いのが貰物の時にもうビニール袋。自由に折り畳めるし、ほどよい伸縮性がランタンとケースの隙間を上手に埋めてくれます。タオルなどの布でもいいのですが、伸縮性がない分調整は慎重にやらないでください。もちろんケースに入れたからといってケースの上に重いモノを置いたりするのは厳禁。あくまでやさしく扱いましょう。

注意さえすればランタンは以外に頑丈です

6. ランタンの保管方法

① タンクの圧力を抜いておく。



ホワイトガソリン・タブの場合は、収納する時必ずキャップを緩めて内部の圧力を抜きましょう。圧力がかかったまま長時間移動すると、危険な場合があるからです。もちろん燃料も抜いておくのは言うまでもありません。

加圧状態でしまい込まないこと。

② 虫の死骸は、取り除く。



ランタンにはいたるところに虫の死骸がこびりついているものです。保管する前に歯ブラシでブラッシングし、丹念に取り除いておきましょう。ちょっとした隙間にも入り込んでいますから、入念にチェックしてください。できればマントルも外せバナー部分の目詰まりがないかも確認しておきたいものです。(マントルがまだ新しい場合は次の取り替えの時にチェックしましょ)サビがある場合はブラッシングでサビを落とし、必ずサビ止めをしておきましょ防錆剤を布にしみ込ませて、バナー部分を磨くように拭けばOKです。

バーツの裏側もよく確認してください。